「新しい東北」官民連携推進協議会
令和7年度　第三回意見交換会

岩手県

1月29日

株式会社JTBコミュニケーションデザイン

● アジェンダ（岩手県）

３．令和７年度における取組振り返り（岩手県）

３－１．実践の場実施報告（岩手県）

３－２．東北3県･石川県合同セミナー実施報告

３－３．本年度事業実施の振り返り（ご意見）

４．第2期復興･創生期間における取組振り返りおよび

第3期復興･創生期間に向けて（JCD/副代表団体）

３－１．実践の場実施報告（岩手県）

（１）実施概要

■実施概要

〈イベント名〉　あのときの私に伝えたいこと～震災の教訓を次世代へ～

〈実施目的〉　震災当時の経験想いを記録し次世代へ伝えることを目的とし、学生と沿岸部で働く若者が交流し復興の歩みを学びます。

取材内容は映像や記録としてアーカイブ化し、防災・復興教育に活用していきます。

〈参加者〉　運営委員会：大学生6名

参加者：大学生14名※フィールドワークからの参加者

全体参加者：20名

〈実施内容〉　11月2日（日）

フィールドワーク3コース

（田野畑・宮古コース/釜石コース/陸前高田・大船渡コース）

● 3－1．実践の場実施報告（岩手県）

（2）参加者

〈グループ① 田野畑・宮古コース〉

		氏名	フリガナ	所属
運営委員会	1	[redacted]	[redacted]	岩手大学
	2			岩手大学
	3			岩手大学
参加者	4			東洋大学
	5			淑徳大学
	6			金沢大学
	7			國學院大学

〈グループ② 釜石コース〉

		氏名	フリガナ	所属
運営委員会	1	[redacted]	[redacted]	岩手大学
	2			岩手県立大学
参加者	3			金沢大学
	4			岩手大学
	5			宮城教育大学
	6			神田外語大学
	7			東京大学

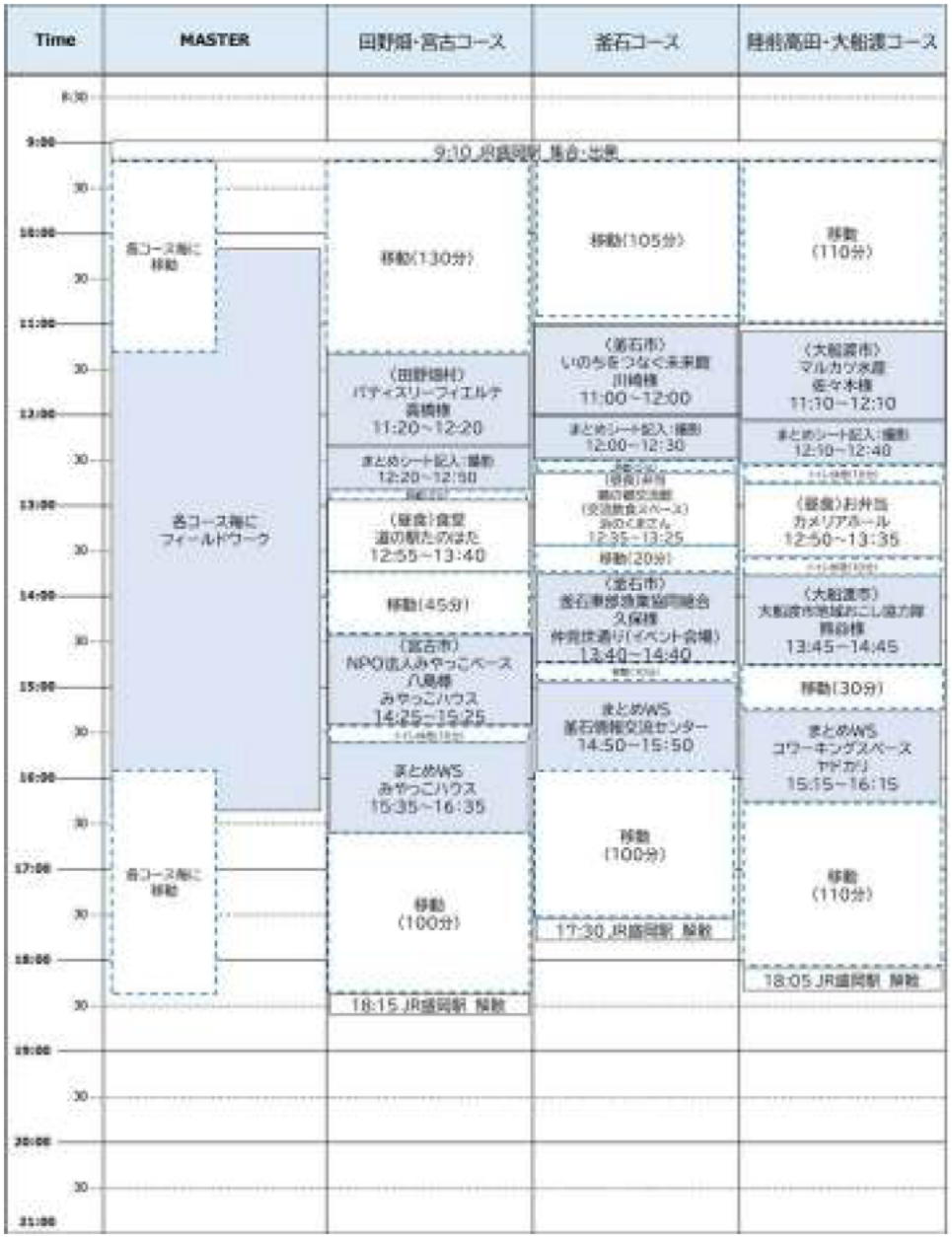
〈グループ③ 陸前高田・大船渡コース〉

		氏名	フリガナ	所属
運営委員会	1	[redacted]	[redacted]	岩手大学
参加者	2			岩手県立大学
	3			東京大学
	4			慶應義塾大学
	5			神田外語大学
	6			東北大学

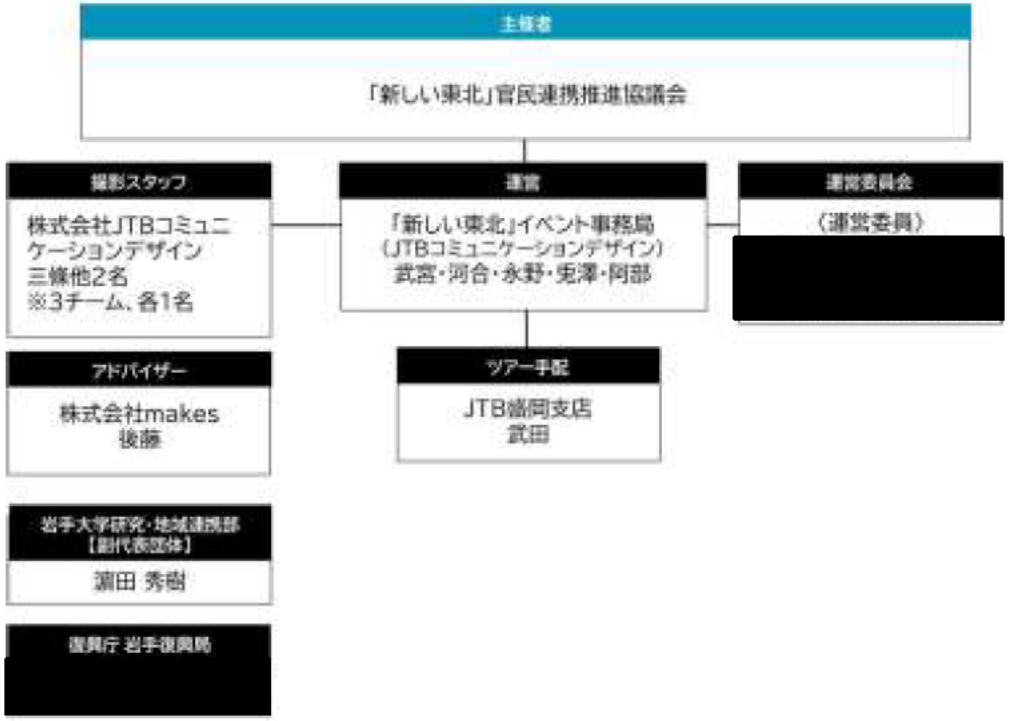
※募集チラシ

● 3－1．実践の場実施報告（岩手県）

（3）当日スケジュール



■実施体制



３－１．実践の場実施報告（岩手県）

（４）実施の様子

■洋菓子店「パティスリーフィエルテ」髙橋 奈々美 様への取材

■NPO法人みやっこベース
八島 彩香 様への取材

■みやっこハウスでの交流会

■いのちつなぐ未来館　川崎 杏樹 様への取材

■釜石東部漁業共同組合 両石湾隆丸
久保 翼 様への取材

■釜石情報交流センターでの交流会

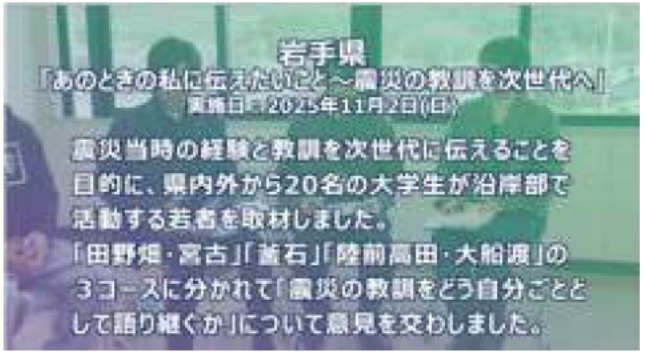
■マルカツ水産　佐々木 晶生 様への取材

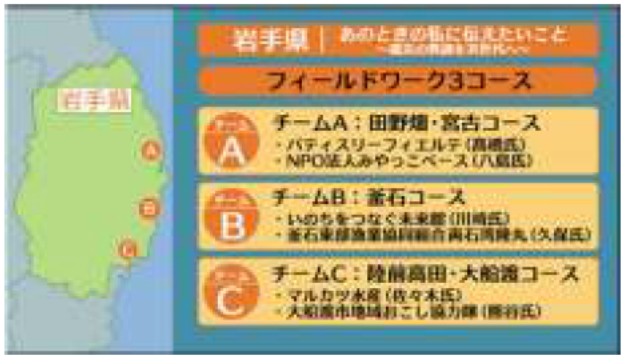
■大船渡市地域おこし協力隊
熊谷 光 様への取材

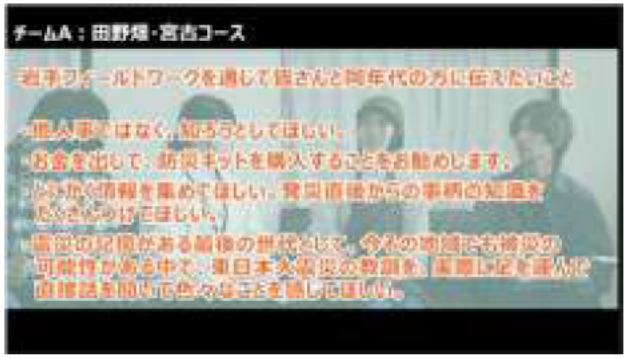
■コワーキングスペースヤドカリでの
交流会

● 3－1．実践の場実施報告（岩手県）

（４）実施の様子







新しい東北岩手版 本編　　デジタルアーカイブ

３－１．実践の場実施報告（岩手県）

（５）取りまとめシート記載内容の整理

◆全体のまとめ①【気づき】

- 「奇跡」ではなく「備え」：釜石チームの「奇跡は日頃の訓練の結果」という気づきや、他チームの「自分の身は自分で守る」という視点など、防災を「運」ではなく「実践」として捉え直している点が共通している。
- 「被災地」から「魅力ある地域」へ：３チームとも、現地の方の温かさや「郷土愛」「恩返し」の想いに触れ、ネガティブなイメージ（かわいそうな被災地）が払拭され、ポジティブなイメージ（人が温かく、挑戦している地域）へと変化している。
- 「行くこと」の価値：ネットや報道では伝わらない「リアルな空気感」や「避難所の現実」を知るため、現地への訪問が不可欠であるという確信を得ている。

◆全体のまとめ②【伝えたいこと】

- 記憶の継承と当事者意識：「震災を知る最後の世代」として、過去の教訓を風化させず、同世代へ「自分事」として語り継ぐ責任を自覚している。
- アクションの変容（備える・行く・知る）：単に「思う」だけでなく、「防災グッズを買う」「現地に行く」「話を聞く」という具体的なアクションを同世代に求めている。
- 先入観の打破：「復興」を重苦しい義務としてではなく、地域の魅力に触れる「前向きな関わり」として捉えてほしいと願っている。

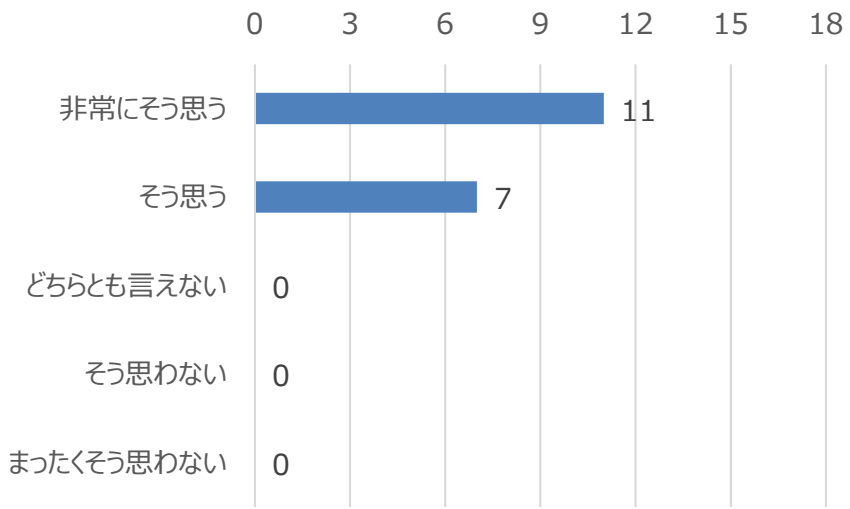
◆所感

- 岩手県の実践の場において特筆すべきは、学生たちが「被災地の悲劇」に留まらず、「人間の強さ（レジリエンス）」と「備えの具体性」に焦点を当てている点である。
- チームAの「郷土愛によるコミュニティ形成」、チームBの「奇跡を支えた教育と訓練」、チームCの「恩返しという原動力」――これらは全て、能登などの新たな被災地にとっても希望となる視点である。
- 学生たちは、現地の方々との対話を通じて「支援する／される」という一方的な関係を超え、「共に未来を考えるパートナー」としての自覚を持ち始めている。この「共感」と「敬意」に基づいたメッセージこそが、12月の合同セミナーにおいて、他県の参加者や次の世代の心を動かす鍵になるだろう。

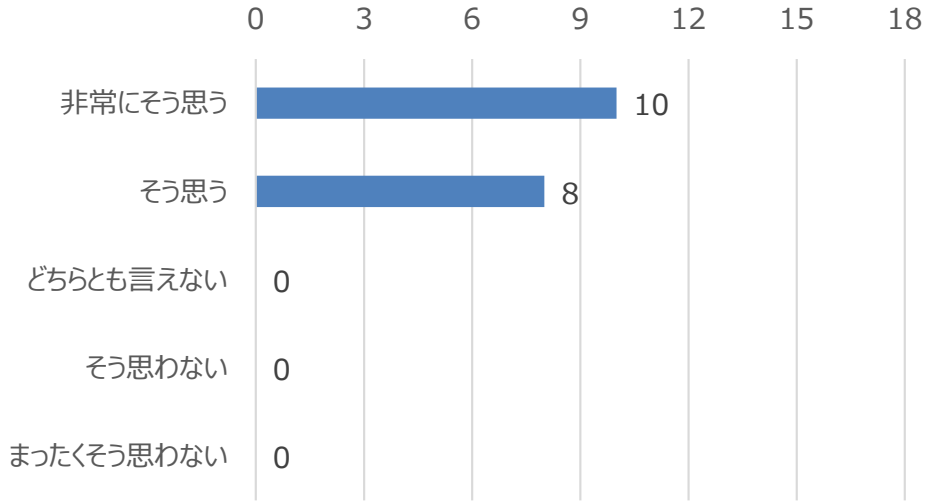
３－１．実践の場実施報告（岩手県）

（６）参加者アンケート

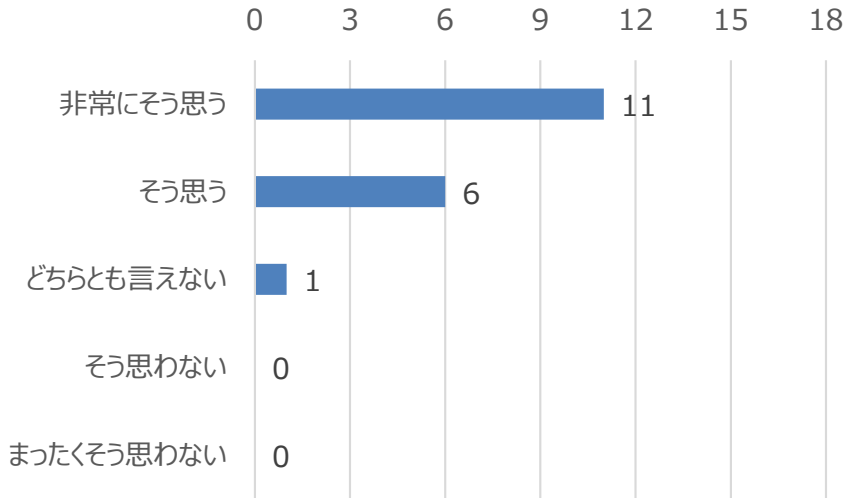
Q. 全体として「実践の場」に参加して良かったと思いますか？（n=18）



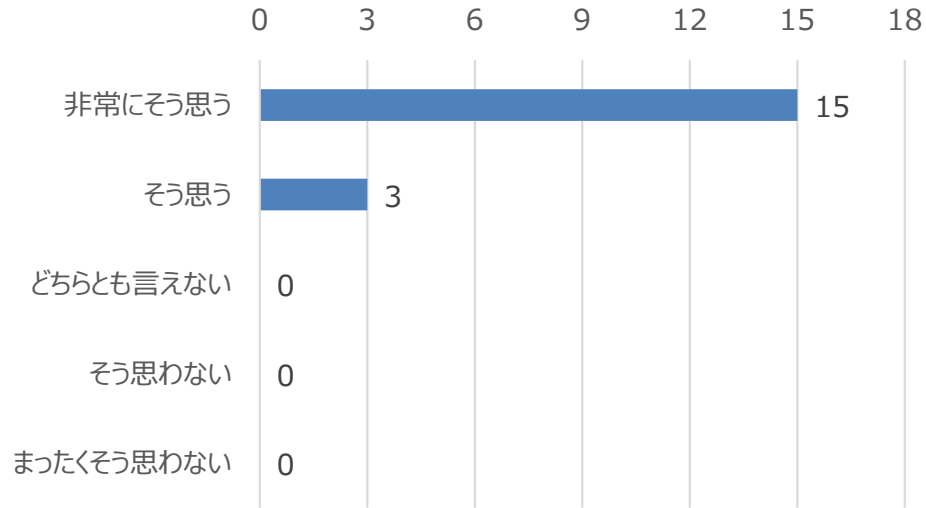
Q. 震災や復興に関する理解が深まりましたか？（n=18）



Q. この経験を他の人におすすめしたいと思いますか？（n=18）



Q. 今後も復興・防災・地域づくりに関心を持ち続けたいと思いますか？（n=18）



（６）参加者アンケート（1/2）

Q. 本事業の「つながりのその先へ」「震災の記憶をつなぐ」意味から、今回の取材を通じて感じた、皆さんと同世代の若者に伝えたいメッセージをご記入ください。

- 文章や写真では伝わらない、直接話してはじめてわかる東北の人の思いがあると思います。ぜひ東北を訪れ、学びを深めてほしいです。
- 震災当時を学ぶだけでなく、復興後の現在についてもしっかり知ることが大切である。そして、自分事として捉え、今できることをやってほしい。
- 人と関わりを持て！
- 被災地域では昔の姿をそのままに残してほしいという声の方が多いのかと思ったが、意外にも新しく変えていってほしいという声が多くあることは新たな気づきだった。
- 震災の記憶が風化しないように僕たちも東日本大地震の被害を後世に伝えていきたい。
- 災害はどこにいても必ず起こる、だからこそ準備、備えが大切で、災害は起きても被災を抑えることはできるというのが1番印象的でした。そして、被災地を被災地だけとしてみるのではなく、特産物や今ある姿を求めて訪れてみる、関わってみることが必要だと思いました。
- 防災は災害を触れる機会が多く、暗いもの，重いものと感じる方も少なくはありません。同じ地域に存在する「沢山の人が生存した場所」と「沢山の人が亡くなった場所」。前者の方を注目し，後者は触れたくないものと感じてしまう人も多いかもしれません。しかし、両者とも同じくらいの教訓があり、今を生きる我々にとっては両者とも目を背ける対象ではありません。僕も、皆さんもそうですが、亡くなった方が生き返ることはありません。我々がこれからできることは、起きてしまったことを怖いこと、悲しいこととして避けるのではなく、しっかり関わって教訓を拾い上げ、周囲に広げ、未来へ活かすことしかありません。特に教員は、未来を生きる子供達に「自分の命を守ることができる力」を養わなければなりません。教員、教育関係者だからこそ、過去の凄惨な出来事に真正面から向き合い，二度とそのようなことが起こらないよう、強い気持ちで教壇に立たなければならない。そう思います。
- 自分の好きなもの、こと、場所などをじっくり考えてみてください。そして色々な経験を積んでください。その想いが原点となって、自分自身のウェルビーイングが実現できると思います。
- 自分のためにも日頃から備える気持ちと行動力を持って欲しいなと思います。

３－１．実践の場実施報告（岩手県）

（６）参加者アンケート（２/2）

Q. 本事業の「つながりのその先へ」「震災の記憶をつなぐ」意味から、今回の取材を通じて感じた、皆さんと同世代の若者に伝えたいメッセージをご記入ください。

- 私は今回の実践を通して、改めて震災を経験した最後の世代として、上の世代の方から教訓をえて、それを後世に繋いでいくことの大切さを実感しました。震災がどういった被害をもたらし、あの時どのようなことがあったのか、命を守るためにはどうしなければいけないのか、そして震災から生まれた地域のつながりや新しい事業など、震災による被害や教訓だけでなく今の三陸地域の現状を直接現場に足を運んで、地域の方とお話をして、さまざまなことを感じ取って欲しいです。今、三陸だけでなく全国で震災の可能性がある中で、東日本大震災を他人事ではなく自分ごととして捉えて、過去を知り後世につなぐ責任がある立場だと実感して欲しいです。
- 震災は繰り返すものだとおもうので教訓を無駄にしないように語り継いで欲しいです。
- 未曾有の自体のさなかでも熱い想いをもって今も頑張ってる若者がいるということ。都会の企業で、年収や出世を競うような将来だけがすべてではないこと。
- つなぐことの根本的な意味や価値に関しての検討はなされていないと思いつつも、悩むよりも先に実践的にその場に行くことに価値があることを伝えることには価値があるように思われた。
- 2度と震災と同じ被害規模にならないよう被災者の思いを聞き、あたりまえがいかに一瞬で崩れ去るか、自分が有事の際にはどうするべきかを考えてほしい。
- 被災地は今、ある程度の復興を経て、次の段階へ進んでいるところです。被災地を、そして被災地の方々を「震災があった場所」「被災して可哀想な方々」として認識するのではなく、ひとつの地域や街として見てほしいと思います。ただし、それは震災やその悲惨さを忘れてもいい、知らなくてもいい、という意味ではありません。知り、感じたうえで前向きに関わっていってほしいです。
- 震災から15年、いまだにその被害を引きずっているところがある。その一方で、若者（若者に限らずですが）の風化が問題になっている。災害大国日本に住まう以上、いつどこでどのような災害に遭うかはわからない。いざというときに動けるようにしておかないと自分の命はない。震災を過去のただの歴史として学ぶだけではなく、被害の状況、次に活かせる反省点をしっかり自分の中に定着させることを意識して、全員が学んでほしい。
- 被災した人に話を聞いてみてください。自分が思ったことと共に聞いたことを周りの人へ伝えてほしいです。どこに居ても災害は起こります。だからこそ、震災を自分事にして備えてほしいです。

３－１．実践の場実施報告（岩手県）

（７）取材対象者感想

【田野畑・宮古コース】
災害への備えはしてもしすぎることはないので、皆さん今一度家族や大事な人と共有お願いいたします。
学生さんが関わってくれるのは非常に嬉しいし、刺激をもらえるので今まで以上に頑張ります。

【釜石コース】
震災の当時より、次の災害に関しての防災に関心がある方も増えているのでそういう取り組みも行いたい。
今回の学生はいいが、防災の取り組みを行っても学ぶ意識の低い人がいるので、環境づくりを今後していってほしい。

【陸前高田・大船渡コース】
震災があろうと生活し続けている魅力がある場所なので、被災地というところで見るのではなく、次は是非大船渡の魅力に気付いて、遊びに来てほしい。
震災だけではなく、火災もあるので防災に対しての取り組みを行ってほしい。

３－１．実践の場実施報告（岩手県）

（８）メディア掲載

■岩手日報11月4日掲載

■東海新報11月4日掲載

1月31日
テレビ岩手「5きげんどようび」
60秒程度

３－２．東北３県・石川県合同セミナー実施報告

（１）開催概要

「新しい東北」官民連携推進協議会　東北3県・石川県合同セミナー
震災の教訓を共有し、復興の知恵を次世代へ

●日　時:　2025年12月20日(土)
13:30-16:30(開場 13:00)

●会　場:　石川県地場産業振興センター　本館
セミナー会場:　第1研修室(本館2階)

●概　要:　東日本大震災から15年を迎えるにあたり、東北3県で培った官民連携の知見と、復興の途上にある能登地域の現状や課題を共有し、対話を通じて今後の地域間連携のあり方を共に考える機会として開催。

●主　催:　「新しい東北」官民連携推進協議会、復興庁
（岩手県、岩手大学、岩手銀行、いわて連携復興センター）
（宮城県、東北大学、七十七銀行、みやぎ連携復興センター）
（福島県、福島大学、東邦銀行、ふくしま連携復興センター）

●共　催:　金沢大学 能登里山里海未来創造センター

●連携先:　能登官民連携復興センター

●協　力:　副代表団体、実行委員会に参加した高校生・大学生

●参加者数:一般参加者:32名(事前登録39名)・登壇者・関係者:38名
・オンライン参加者:39名(事前登録35名)計109名

●取材メディア一覧:　テレビ金沢　石川テレビ　北陸放送　北陸朝日放送　北國新聞　金沢日和

３－２．東北３県・石川県合同セミナー実施報告

（２）告知チラシ

３－２．東北３県・石川県合同セミナー実施報告

（３）プログラム内容

TIME	プログラム内容
13:00	開場・受付開始
13:30	オープニングトーク:
13:40	第1部①:官民連携推進協議会の取組について 石川県＋副代表大学(岩手・宮城・福島)による講演(各10分) 【講演テーマ】 ・金沢大学:(谷内江 昭宏　先生)「能登地域の復興の現状と課題」 ・岩手大学:(五味 壮平　先生)「災後の地域に大学はいかに関わり得るか－陸前高田での実践を通して考える－」 ・東北大学:(姥浦 道生　先生)「官民連携による復興まちづくり事業」 ・福島大学:(藤室 玲治　先生)「学びの地、挑戦の地・福島に集う若者と取り組む復興ーふるさと愛プロジェクトー」
14:25	第1部②:能登×東北 対話の時間 金沢大学・東北3県・自治体・企業等によるトークセッション(30分) 【テーマ】 『新しい東北の取り組みから考える、復興における官民連携の姿』
15:00	休憩(10分)
15:10	第2部:若者たちのメッセージ (1)実践の場(フィールドワーク)映像上映(8分) 発表用8min V3 1 (2)交流セッション(学生同士の対話) (70分) ・現地に行く前のイメージと、行ってから見えた「リアル(ギャップ)」は何でしたか？ ・震災を知らない世代や、同世代に向けて「これだけは伝えたい」メッセージは？ ・「MY ACTION宣言」明日から何を始める？ ・地域に住み続ける／離れる理由 〈クロージングトーク〉(2分)
16:30	終了

３－２．東北３県・石川県合同セミナー実施報告

（４）実施の様子

■オープニングトーク
（復興庁　復興知見班　参事官　佐藤　将年氏）

■講 演 ① 金沢大学 理事・副学長　能登里山里海未来創造センター長　谷内江 昭宏 氏

■講 演 ② 岩手大学 人文社会科学部人間文化課程 教授　五味 壮平 氏

■講 演 ③ 東北大学 災害科学国際研究所 教授
姥浦 道生 氏

■講 演 福島大学 センター・研究所等　地域未来デザインセンター 特任准教授　藤室 玲治 氏

■能登×東北　対話の時間

■【第2部】若者たちのメッセージ
（1）実践の場（フィールドワーク）映像上映

■【第2部】若者たちのメッセージ（2）
交流セッション（学生同士の対話）

■【第2部】若者たちのメッセージ（2）
交流セッション（学生同士の対話）

■【第2部】若者たちのメッセージ（2）
交流セッション（学生同士の対話）

■【第2部】若者たちのメッセージ（2）
交流セッション（学生同士の対話）

■フォトセッション

３－２．東北３県・石川県合同セミナー実施報告

（４）実施の様子　動画配信ベース

※映像：https://www.youtube.com/watch?v=0zDqG7r-NtQ

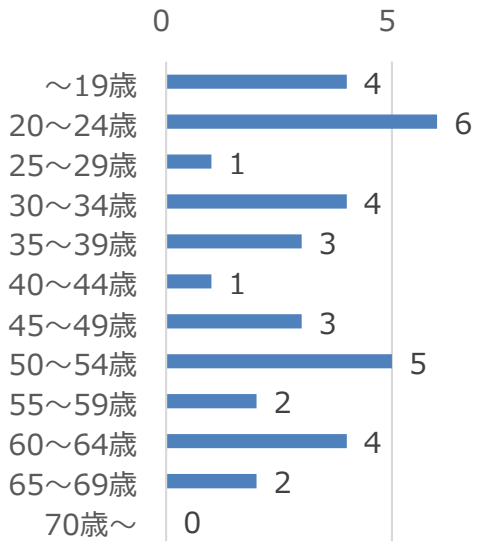
３－２．東北３県・石川県合同セミナー実施報告

（５）参加者アンケート

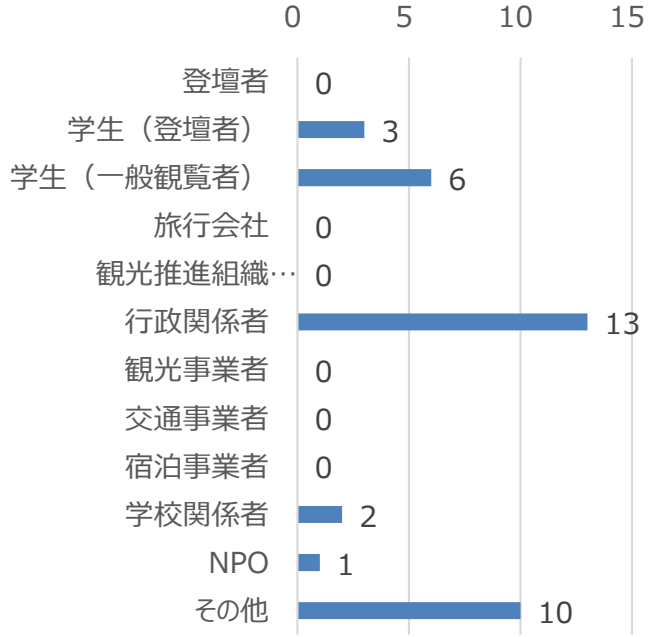
回答者属性：居住地(n=35)

居住地	人数
石川県	13名
岩手県	8名
宮城県	5名
福島県	3名
千葉県	1名
東京都	1名
新潟県	1名
富山県	1名
京都府	1名

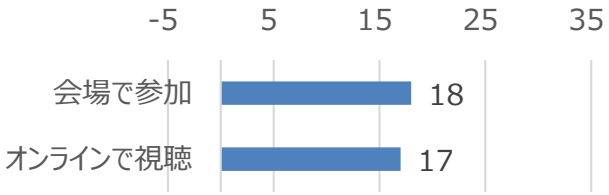
回答者属性：年齢(n=35)



回答者属性：職業(n=35)

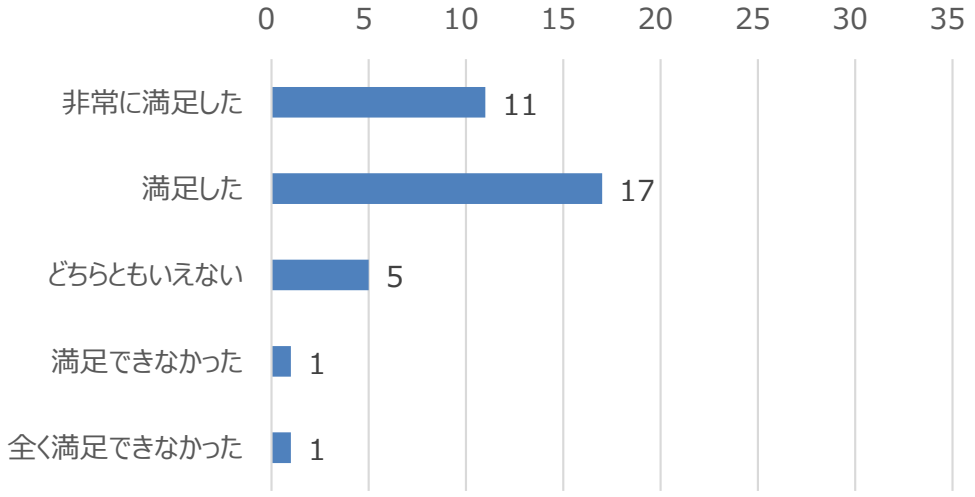


回答者属性：参加形態(n=35)

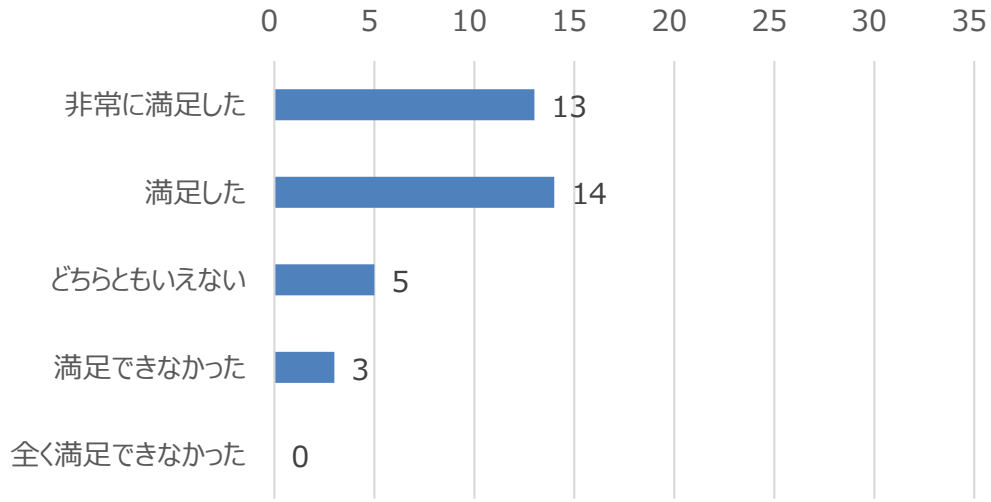


３－２．東北３県・石川県合同セミナー実施報告

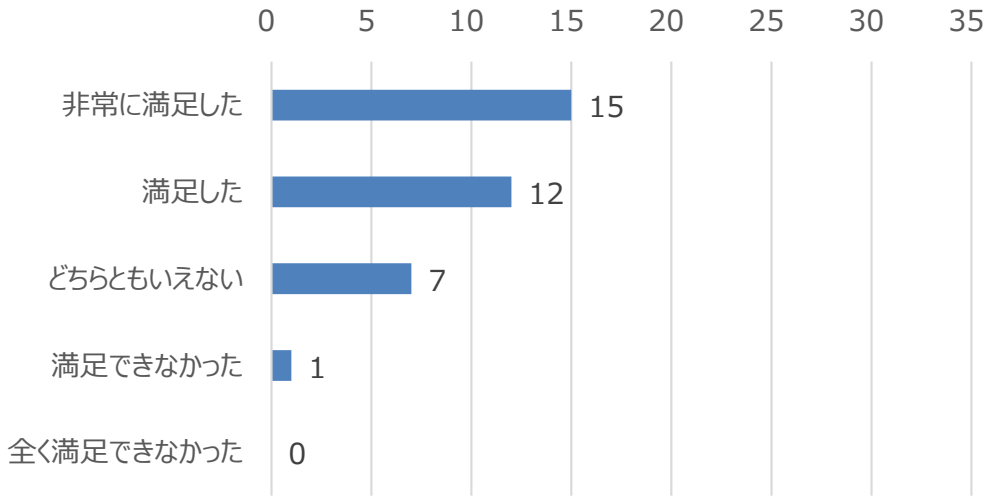
【満足度】 第1部「①官民連携推進協議会の取組について」(n=35)



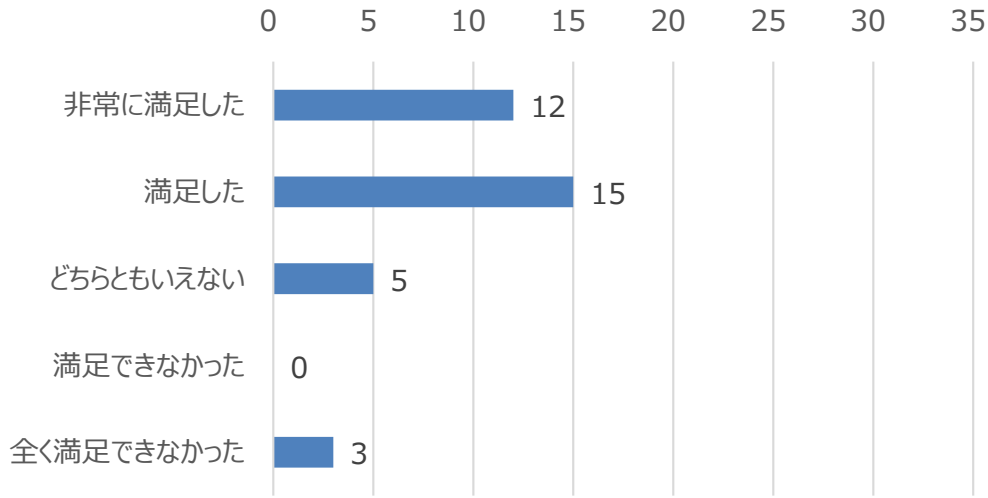
【満足度】 第1部「「②能登×東北 対話の時間」(n=35)



【満足度】 第2部「若者たちのメッセージ」 (n=35)



【満足度】 本セミナー全体の評価(n=35)



３－２．東北３県・石川県合同セミナー実施報告

（６）メディア掲載

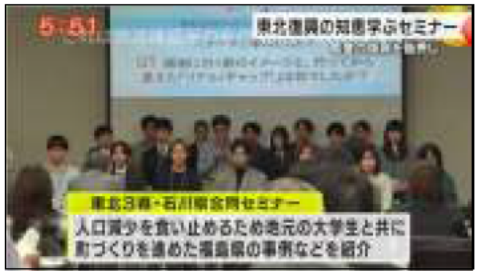
■メディア向け資料
【取材依頼】プレスリリース用

■テレビ金沢　12月21日放映

３－２．東北３県・石川県合同セミナー実施報告

（６）メディア掲載

■石川テレビ　12月21日放映



■石川テレビ（WEBニュース）12月21日掲載

３－２．東北３県・石川県合同セミナー実施報告

（６）メディア掲載

■北陸朝日放送　12月21日放映

■北陸放送　12月21日放映

３－２．東北３県・石川県合同セミナー実施報告

（６）メディア掲載

■北國新聞　12月21日掲載

■金沢日和WEBサイトへ掲載

３－３．本年度事業実施の振り返り（ご意見）

■　実践の場に関する振り返り

- 取材や交流の場において、沿岸地域の方々が自らの経験や思いを丁寧に語ってくださり、学生にとって震災や復興を「自分事」として捉える機会を提供できたことは、本事業の重要な成果である。
- 学生の感想にも見られるとおり、地域の現状や将来について考え、言語化し、発信するための「場」を用意できたことは、学びの深度を高めるうえで有効であった。

【課題・反省点】

- 沿岸部までの移動距離・時間を考慮すると、日帰り行程では時間的制約が大きく、1泊行程とすることで交流や振り返りの時間をより充実させる余地があった。
- 現地での取材・交流内容を整理し、学生同士で共有・言語化する時間を、行程内で十分に確保できなかった。
- 取材対象者の協力に支えられた一方で、事前に取材テーマや視点をより明確にしておくことで、議論をさらに深められた可能性がある。
- 取組成果を次の学びや発信へどうつなげるかについて、事後のフォロー体制をより明確に設計する必要がある。

■　3県合同セミナーの振り返り

- 岩手・宮城・福島に加え、金沢から大学教員を招き、第三者の立場から現状の取組についてコメントをいただけたことは、非常に貴重な機会であった。
- 専門的な視点からの助言により、今後の展開や課題を客観的に整理することができた。
- 学生自身が登壇し、生の声で経験や気づきを語ったことで、事業の成果がより具体的かつ説得力をもって共有された。

【課題・反省点】

- 各県の取組内容が多岐にわたるため、全体構成や時間配分について、より整理した進行とする余地があった。
- 来場者・視聴者の属性に応じた説明レベルや資料構成について、実践の場をより詳細に説明する資料を加えるなど、さらなる工夫の余地があった。
- 学生発表の時間を確保できた一方で、参加者同士の意見交換や質疑の時間を十分に設けられなかった点は反省点である。

● 4．第2期復興・創生期間における取組振り返りおよび第3期復興・創生期間に向けて（JCD/副代表団体）

震災からの復興過程における人のつながりや学びの創出を軸に、岩手県では学生・若者や地域の担い手が主体となり、三陸沿岸部を中心とした交流・学習型の取組を継続して実施してきた。過年度には、交流会や座談会を通じて、地域の歩みや将来像を共有するとともに、エクスカーションプログラムや学び旅を通じて、復興の姿や教訓を現地で学ぶ実践の場を形成してきた。今年度は、沿岸部で働く若者や高校生による取材・発信を通じて、震災の経験や復興の歩みを記録・アーカイブ化し、防災・復興教育への活用も見据えた取組を実施した。

	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和６年度	令和７年度
テーマ	震災10年の節目における交流とつながりの再確認	地域の今と未来を自ら語る場づくり	復興の姿を学ぶエクスカーションによる理解促進	若者と沿岸部による学びと交流の深化	若者世代による沿岸部の探求と発信	震災の教訓を次世代へつなぐ実践の総括
実践の場	「いわて沿岸とつながる交流会 －これまでの10年を未来の力に－」 三陸沿岸部で活動してきた多様な担い手が集い、地域資源や人材、活動のつながりをもとに未来志向での関係構築を図る交流イベントを開催。	「釜石の今と未来を考える 座談会」 地域の歩みや将来像について、住民自身が発信し、市民・企業・学生など多様な参加者が意見交換を行う座談会を開催し、ふるさとへの関わり方を共有した。	「三陸沿岸地域の復興の姿を知るエクスカーションプログラム」 みちのく潮風トレイルを活用したエクスカーションツアーを企画し、行政関係者や研究者等を対象に、復興の取組理解とネットワーク形成、課題共有を目的として実施した。	「三陸沿岸学び旅・交流プログラム」 内陸部の若者と三陸沿岸の事業者が協働し、オリジナルツアーの造成・実施を行うとともに、事後の振り返りを含む交流型プログラムを実施した。	「岩手さんりくを探求！YOUTH特派員招待状作成ワークショップ」 高校生が沿岸部を訪問・取材し、動画や招待状の作成を通じて情報発信を行い、発表イベントにも登壇した。	「あのときの私に伝えたいこと～震災の教訓を次世代へ～」 三陸沿岸部を舞台に、学生と沿岸部で働く若者が交流し、震災当時の経験や復興の歩みを取材した。取材内容は映像や記録としてアーカイブ化。
次年度への課題	交流を一過性の機会にとどめず、若い世代や新たな担い手の参画を促し、継続的な実践の場へと発展させていくこと。	意見交換にとどまらず、現地体験や取組の検証を通じて、学びを行動につなげる実践型の取組へと展開すること。	モニタリング結果を整理し、若者の参画や発信を含めた、より開かれた実践の場へと展開すること。	交流や体験を成果として可視化し、次世代に継承できる発信や仕組みへとつなげていくこと。	若者による取材・発信の成果を体系的に整理し、官民連携による復興の知見として広く共有・継承していくこと。	意見交換会にて議論